研究ノート

瀬戸内の万葉ノート(一)

On *Setouti-no-Manyoshu* 1

田場裕規
TABA Yuuki

瀬戸内の万葉は、その故地とともに生き続けている。しかし、景観の変貌は著しく、かつて万葉人が見た景物は徐々に変化している。本稿は、二〇一七年五月三日～七日に淡路・讃岐・備前・播磨・摂津の万葉故地を廻った調査の一部をもとにしている。ここで取り上げるのは、明石大門、松帆の浦、野島の崎、飼飯の海である。これまで万葉故地の探査を続けてきたのは、歌の世界と実景との質的・感覚的な近似値を求めてのことであった。「見る」行為の感覚的な曖昧さを少しでもうたわれた世界に近づけることができないかと考え、万葉故地を歩いてきた。ここでは、万葉の人々が瀬戸内の景色をどのように見てきたのかを辿って行きたい。そして、現代の景色との比較の中で景観の保全と万葉文化の継承を考えていきたい。掲出する万葉歌の「訳文」は『萬葉集』(塙書房)、「大意」「語釈」「釈文」は伊藤博『萬葉集釋注』(集英社)、阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』(笠間書院)を引用し、適宜追加した。

一　明石の大門

巻三「柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首」歌群は、御津249(難波の港)→敏馬250(神戸港の東)→淡路島251→藤江252(明石市西部)→稲日野253(明石から加古川にかけての平野)→明石大門254・255(明石海峡)→笥飯の海256(淡路島西岸一帯の海)の地名が並ぶ。その中から明石大門を詠む歌二首を抄出する。

柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首（二首抄出）

(1)
燈火の　明石大門に
入らむ日や
漕ぎ別れなむ
家のあたり見ず

燈火の明き明石、その明石の海峡に
さしかかる日には、
故郷からまったく漕ぎ別れてしまうことになるのであろうか。
もはや家族の住む大和の山々を見ることもなく。

（巻三・二五四）

○燈火の　「明石」の枕詞。灯火は明るいので「あかし（明石）」にかかる。**○明石大門**　明石海峡。明石市と淡路の北端との海峡。孝徳紀大化二年（六四六年）正月一日の大化改新の詔によれば、明石の櫛淵（くしぶち）から西は畿外とされているので、海路では明石海峡が畿外と畿内を分ける海坂（うなさか）（海の境界）であった。明石海峡の通過は、畿内から畿外に出るということになり、「明石大門に入らむ日や」と言ったのであろう。ゆえに、西行きの旅。**○入らむ日や漕ぎ別れなむ**　さしかかるであろう日には～するであろうか、の意。「や」は疑問的詠嘆で、下の「なむ」（完了の助動詞「ぬ」を強意に用いて、「む」は推量の助動詞連体形）で結ぶ。**○家のあたり見ず**　明石海峡から、大和と河内との境界の生駒連峰、二上山から南の葛城・金剛山が、故郷大和で家族の住むところ。

◆交通の難所　難波津を出て、西行しようとする船は、作者を乗せて明石大門にさしかかった。その心境は、「漕ぎ別れなむ」という表現に凝縮している。畿外と畿内とを分かつ海坂を目の前にして、家郷への思いは、一層哀感が極まるのであった。もはや、大和を見ることはできなくなってしまった、という作者には、不安と恐怖もあっただろう。現代は多くの汽船が航行するが、当時は手漕ぎの船である。時速一〇キロの明石海峡の潮流は、思いのほか速く、転覆、座礁もたびたびあったに違いない。そのような交通の難所ともいえる明石海峡から家郷を慕い、海原の船の中から陸地の山を探す感覚は、汽船の速度でかき消され、今は平穏そのものである。

柿本神社（兵庫県明石市人丸町）

◆柿本人麻呂と明石　⑴歌は、次の⑵歌とともに、柿本人麻呂と明石を強固に結び付けている。明石市人丸町には、柿本人麻呂を祀った柿本神社がある。学問の神様として、全国の人々から崇敬されている。明石の人々にとって、柿本人麻呂と⑴⑵の歌の景観は、心のふるさととして定着している。日々見る明石の海景は、古代において人麻呂が見た海景であり、自分自身の日常の視覚の一部でもある。その視覚は、「文化の地層」の中に自分自身を発見することにほかならない。後代、柿本人丸「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ」（古今集）に因んで、ＪＲ朝霧駅（昭和四十三年）が開設された。明石は、「景」のなかに古代があり、その中に自分の視覚を重ねることができるところである。

⑵　天離る　鄙の長道ゆ　　遠い田舎の長い道のりを
恋ひ来れば　明石の門より　　ひたすらに都恋しさに上って来ると、明石海峡から
大和島見ゆ　　大和の山々が見える。

（巻三・二五五）

○天離る　「鄙」の枕詞。天のかなた、遠く離れている意。天の語を用いたところには、空の果てに位置する意もあるのであろう。**○長道ゆ**　長い道のりをずっと。「ゆ」は経由を示す。**○大和島**　故郷大和のある陸地。生駒・葛城連峰を目してこういったもの。「島」は水などの自然現象によって画された地域をいう。生駒。葛城連峰が海上から島のように見えるのをさして大和島といったもの。

◆古歌を想起する遣新羅使人　⑴歌は、西下の歌であるのに対して、⑵歌は東上の歌である。明石海峡は、家郷大和と別れる場所であると同時に、帰郷の時は、玄関口でもあった。⑴では、「見ず」と嘆いたが、⑵は「見ゆ」といって喜びを示す。⑵歌は、巻十五・三六〇八とほぼ語句が一致する。「天離る鄙の長道を恋ひ来れば明石の門より家のあたり見ゆ」とある。この歌巻は遣新羅使人に関わるものなので、一行は、古歌である⑵を想起したと思われる。なお、「柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首」には、一本歌があり、それは巻十五に収録する遣新羅使人が船上で誦詠した古歌の表現と一致する。

二　松帆の浦

神亀三年（七二六）の十月七日から二十九日まで、聖武天皇の播磨国印南野行幸があった。『続日本紀』には、十月十日に印南野の邑美（おうみ）の行宮に到着したとある。その時の笠金村の作歌。松帆の浦は、淡路島の北端の海浜。明石海峡を隔てて、名寸隅（なきすみ）と相対する。犬養孝『万葉の旅　下』には、松帆の浦について「明石から連絡船で淡路島の岩屋に上陸して、バスで一〇分ほど北に行った淡路島最北端の松原のつづきの一角が松帆浦である。こんにち、長浜の北の竜松の台場から岬の松原までのあいだに松帆の漁村がある。手こぎ船のころには松帆の岸辺には海峡潮待ちの船も見られただろう。松原の海浜に立つと、海峡の好風を一望におさめ目前を速い潮が流れている」（38頁）と述べる。同頁の「淡路島松帆の浦」と付された写真は、巻末写真撮影者一覧によると高橋三知雄の撮影が確認できる。松の生える海浜に木造船が二艘ほどあり、遠くに水平線が霞むモノクロ写真である。現在の松帆の浦に、松原は確認できない。二〇一七年五月三日に行った現地探査では、ハマダイコンの花などを確認したが、松は確認できなかった。後代、海浜には、徳島藩が「松帆台場」（現在は神戸製鋼の保養所「ゆうなぎ荘」が建つ）を徳川家茂の命で着工し、文久元年（一八六一）に竣工している。松帆の浦比定地に立つと、明石海峡を航行する船は手に取るように見える。古代の人たちは、海峡が荒れた時、風待ちや潮待ちのために、この地に船を寄せた。つまり、松帆は待つ帆の転化ではないかともいわれる。

三年丙寅の秋九月十五日に、播磨国の印南野に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首〈并せて短歌〉

(3)　名寸隅の　舟瀬ゆ見ゆる　　名寸隅の舟着き場から見える
淡路島　松帆の浦に　　淡路島の松帆の浦で，
朝なぎに　玉藻刈りつつ　　朝凪の時には玉藻を刈ったり、
夕なぎに　藻塩焼きつつ　　夕凪の時には藻塩を焼いたりしている

松帆の浦（兵庫県淡路市岩屋）

海人娘子　ありとは聞けど　美しい娘子たちがいるとは聞くが、
見に行かむ　よしのなければ　その娘子たちを見に行く手だてもないので
ますらをの　心はなしに　ますらおの雄々しい心はなく、
たわやめの　思ひたわみて　たわや女のように思いしおれて、
たもとほり　我はそ恋ふる　おろおろしながら私はただ恋焦がれてばかりいる。
舟梶をなみ　舟も櫓もないので。

（巻六・九三五）

○三年　神亀三年（七二六）。**○秋九月十五日**　『続日本紀』では、この年の聖武天皇の行幸について、十月七日出発、十日に印南野の邑美の行宮に到着、十九日に難波の宮に還幸、二十九日帰京と記す。九月十五日は行幸の詔の発せられた日か。『続日本紀』には、九月二十七日の条に、印南野行幸のために装束司と造頓宮司とを任命したとある。**○印南野**　兵庫県明石から加古川付近にかけての平野。**○名寸隅**　明石市西端の魚住町・大久保町付近かという。**○舟瀬**　舟が風波を避けて停泊する所。波止場。船瀬は大久保町江井島小字西江の浜の築堤付近か。**○松帆の浦**　淡路島の北端付近の海岸。**○藻塩**　藻に海水を含ませ、これを焼いて作る塩。**○よし**　手だて。**○ますらを**　立派な男子。たおやかな女性をいう、下の「たわや女」の対。**○たもとほり**　同じ所をあちこちめぐる意。「た」は接頭語。別表記は「た廻（もとほ）り」。この句、上の「見に行かむよしのなければ」の、実態として持ち出したのであろう。

反歌二首

(4)　玉藻刈る　海人娘子ども　玉藻を刈っている海人の娘子たちを
見に行かむ　舟梶もがも　見に行く舟や櫓があったらよいのに。
波高くとも　波はどんなに高く立っていようとも。

（巻六・九三六）

○見に行かむ　見にいくことができるような。次句「舟梶もがも」に続く。**○舟梶もがも**　「もがも」は、ある目的

を果たすための手段に対する願望。「見に行」くことがここの目的。**○波高くとも**　「とも」は現に波が高く立っているさまを仮定的にいったもの。

(5)　行き巡り　見とも飽かめや　　行きつ戻りつして、いくら見ても見飽きることがあろうか。
　　名寸隅の　舟瀬の浜に　　名寸隅の舟着き場の浜に
　　しきる白波　　次々とうち寄せるこの白波は。

（巻六・九三七）

○行き廻…　こうして岸辺を行きめぐっていつまで見ても、の意。**○見とも飽かめや**　第二句にこの句を置くこと、同じ金村の九二一にあった。**○しきる白波**　次々とうち寄せるこの美しい白波は、の意。

◆笠朝臣金村　万葉第三期を代表する歌人。海浜、山野、河川などの自然の景観を詠い、地名も多く出てくる（五十一箇所）。生没年ははっきりしないが、歌の題詞のほとんどに作歌年月が明記されている。そこから推測すると、その制作の時代は、霊亀元年（七一五）から天平五年（七三三）の十九年間ということがわかる。金村は、同時代の山部赤人、車持千年とのかかわりが深い人物である。巻六には、行幸に従駕した折、山部赤人や車持千年と競詠している歌がある。行幸地は、吉野、難波、播磨で、同時同所を三者三様の個性で詠っている。金村は六位以下の微官であったと推測されるが、この行幸歌群の掲載順は、金村、千年、赤人の順位が厳しく守られている。

◆景色を眺める余裕　(1)(2)の歌との違いは、海に対する意識、感覚である。船上にあって旅の不安と望郷、帰郷の安堵と喜びを詠う明石の大門の歌とは異なり、都人士が旅の眺めを楽しむ感覚で景色を見ている様子がうかがえる。特に行幸従駕歌に必須の要素であった天皇讃仰、土地誉めなどの格式を抑制して、私的な感情を述べるのは金村の特徴と言える。阿蘇瑞枝は「歌人金村の幇間的性格がみられる歌」と言う。金村の歌には、「見れども飽かぬかも」「見とも飽かめや」「見が欲しからむ」「見る毎に」「見に行かむ」の語句が二度使われ、「見る」は二十九回使用される。抽象や観念を避け、具象表現に徹し、今現実に「見る」世界を重視した。そして、それは現実肯定の態度としてあらわれ、分かりやすい表現に導いていった。景色の向こう側に人間を描くのは、「今、ここ」を見つめるからである。平明寛容な説明的な叙述は、ゆとりのある人生態度のあらわれと言ってよい。幇間的性格とは、現実に即応し生きる人

柄のよさや明るさを指しているのではないだろうか。

三　野島の崎

(6)　玉藻刈る

敏馬を過ぎて
夏草の　野島の崎に　舟近付きぬ
一本に云はく
「処女を過ぎて　夏草の
　野島が崎に　廬りす我は」

海女たちが玉藻を刈っている
敏馬、故郷の妻が見えないという名の敏馬を素通りして、
はや船は夏草茂るわびしい野島の崎に近づきつつある。
ある本で言うには、
美しい藻を刈ると処女の地を行き過ぎて、夏草の茂る
野島の崎に宿りするよ、私は。と言う。

（巻三・二五〇）

○玉藻刈る　実景。一方、玉藻を刈る女（め）（馬）の意で、枕詞的な働きもある。**○敏馬**　神戸港の東、岩屋付近。「見ぬ女（め）」の意を匂わし、都の妻と離れているさびしさをも示している。**○夏草の**　実景。一方、夏草の生い茂る荒野の意を示す枕詞的用法でもある。**○野島**　野島の原文は「奴嶋」。ヌシマと訓むが、ノシマに同じ。「野」はノ（甲類）と発音されるのが普通だが、時にヌとも発音された。「伊勢の奴（ヌ）」（記紀歌謡七八）、「奴（ヌ）つ鳥」（記紀歌謡九八）など。ただし、「野島」を表わすのに、音仮名（奴）と正訓字（嶋）の連合である点は疑問が残る。ここはあくまで一試訓に拠ったもの。「野島」淡路島北端の西海岸。眺望のきく島にいうことが多く、船の寄港地の一つ。**○一本**　本文歌八首ともども、前歌群二四五～八の長田王が収集した資料から出たものかという。長田王は、奈良朝風流侍従の一人。和銅四年（七一一）正五位下。近江守、衛門督を歴任して、天平四年（七三二）十月、摂津大夫。天平九年（七三七）六月、散位正四位下で没。**○処女**　敏馬の東に接する。芦屋市から神戸市東部にかけての地。処女塚などの遺跡がある。**○廬りす**　仮小屋を設けて籠る。**○我**　原文の「吾等」は、「我」の複数性を表す。人麻呂関係の歌では、公衆の場で披露された歌にこの表記を持つものが目立つ。

(7)　淡路の　野島の崎の

淡路の野島の崎の

浜風に　妹が結びし　紐吹き返す

浜風に、いとしい子が結んでくれた着物の紐をいたずらに吹きかえらせている。

（巻三・二五一）

○淡路　淡路島。**○浜風に……紐吹き返す**　私は浜風に紐をいたずらに吹き返らせている、の意。この表現については、澤瀉久孝『萬葉集注釋』に詳しい解説があり、「軽い使役、即ち『浜風の吹きかへすにまかす』といふに近い意味をあらはすものと解すべきである」とある。「紐」は、ここは着物の表紐。旅に出る時女が結んで、無事を祈る習い。

◆浜風に……紐吹き返す　伊藤博は、⑺が存する歌群について「八首は、やはり、いかにも人麻呂らしく、力量が卓越している。その配列も見事で、人びとにも愛唱されて然るべき内容を持つ。」と述べ、⑺について「中でもすぐれているのは、第三首（二五一）であろう。『浜風に……紐吹き返す』は、放任的使役を示す表現で、野島の浜風が妻の魂のこもる表紐を吹き返すのにうち任せて、人麻呂が一人郷愁にくれながら浜辺に茫然と突っ立ているさまをうかがわせる。風と紐とのもつれのかなたに、人麻呂はいとしい妻を幻視して、いつまでも立っている。」（『釋注』）と評価している。阿蘇瑞枝も「第三首の『妹が結びし紐吹き返す』は、旅立ちの際の妻の様子を思い出し、妻恋しい思いを抱いて立っているのであるが、その思いを言葉にしないところに余情があって、そこはかとない旅愁を感じさせる」（『全歌講義』）と言う。しかし、斎藤茂吉『柿本人麿評釈篇巻之上』では、⑹を「人麻呂作中の傑作の一つ」と評する一方、⑺を「羇旅八首中では、先ず普通の出来と評していい」とされている。それは、土屋文明『万葉集私注』が⑺について「理解し易い歌境であり、適当に甘美の情もこめられて居るので、いはば万人向の感銘を湛へて居る」と評していることに関係しているのだろう。

◆野島の海人　兵庫県淡路市野島平林には、貴船神社遺跡がある。弥生時代から古代にかけて、塩づくりをしていたことがわかる遺跡である。現在は、平林海水浴場から内陸方向に「緑の道しるべ大川公園」が整備され、製塩作業をする海人のモニュメントや解説板がある。発掘調査で明らかになったのは塩を取り出す工程。濃縮した塩水を製塩土器にいれ、石敷きの炉に並べ、煮詰め塩を取り出す作業を行っており、炉跡が二十二基以上確認されている。そのうち　十九基は古墳時代末から奈良時代のもので、大阪湾沿岸では塩作りが衰退する時期にあたる。野島の海人は、『日

本書紀』巻十二にも記事がある。履中天皇が皇太子であった頃、仲皇子に追われることがあり、このとき仲皇子の命令で追いかけてきたのが野島の海人であった。「淡路の御原の海人」と並び、有力な海洋の民であった。野島と言えば、阪神淡路大震災の震源となった野島断層が思い出される。貴船神社遺跡のある大川公園から南下すること五・三㎞のところに、「野島断層保存館」が設けられ断層の一部が保存されている。現代では、妻を恋しく思う余情と旅愁とは異なる大自然の驚異も、野島の崎の景として位置づけられている。

四　飼飯の海

(8)　飼飯の浦に　寄する白波　　笥飯の浦に寄せては返す白波、その波のように
　　しくしくに　妹が姿は　思ほゆるかも　　ひっきりなしに、あの子の姿は、私の心を襲ってくる。
　　（巻十二・三二〇〇）

○笥飯の浦　兵庫県南あわじ市松帆慶野付近。国指定名勝「慶野松原」が播磨灘に面している海浜。瀬戸内の寄港地である。**○寄する白波**　上二句は序。「しくしくに」を起こす。**○しくしくに**　「思ふ」「恋ふ」とかかわることが多い。「しばしば」が「見る」ことにかかわることが多いのと相対する。

◆波の音から思い起こす妹の姿　慶野松原の現地踏査は二〇一七年五月に行った。しかし、時間調整がうまくいかず日没後に訪れた。(8)では、寄する白波とあるので、白波しるき海浜を目にしながらの作であろう。しかし、波を感じる視覚と聴覚は一体のものである。むしろ、「しくしくに」という思いを募らせるのは、波音ではないかと感じた。慶野松原は、第二次世界大戦時に陸軍省の管轄にあったことにより、燃料用の新炭材として用いられたほか，食糧増産のために開墾され，江戸時代の規模が大きく損なわれた。巻十二寄物陳思「悲別歌」の部にあり、男の歌。

(9)　飼飯の海の　には良くあらし　　笥飯の海の漁場は風もなく潮の具合もよいらしい。
　　刈り薦の　乱れて出づ見ゆ　海人の釣舟　　刈り薦のように入り乱れて漕ぎ出ているのが見える。
　　たくさんの漁師の釣舟が。
　　一本に云はく　　ある本で言うには、

「武庫の海　舟庭ならし
いざりする　海人の釣舟　波の上ゆ見ゆ」

「武庫の海の海上は穏やかであるらしい。
魚を捕っている漁夫の釣舟が波の上に見える、という。
（巻三・二五六）

○飼飯の海　淡路島西岸一帯の海。島の南に、今「慶野」の地名が残る。**○には**　仕事場。ここは漁をする海面。**○刈薦の**　「乱る」の枕詞。刈り取った薦（沼地に生えるイネ科の多年草）は乱れやすい。**○乱れて出づ見ゆ**　乱れた状態で漕ぎ出している、の意。一般にはミダレイヅミユ。これだと、「これからばらくになって漕ぎ出る」意となってよくないという（鶴久『『乱れいづ見ゆ』か『乱れていづ見ゆ』か」萬葉第三十号）。母音を含む場合、結句は八音になることが習いである点も考慮すべきである。巻十五・三六〇九（「武庫の海のには良くあらしいざりする海人の釣舟波の上ゆ見ゆ」）に対する、この歌をもっての校異にも、「美太礼弖出見由（みだれていづみゆ）」とある。「見ゆ」は、活用語の終止形を承け、多くは視覚的な断定を婉曲に言い表わす。○武庫の海　西宮市から尼崎市にかけての海。○舟庭ならし　「舟庭」は漁師の仕事場の意で、「ならし」は「にあるらし」の約とされている。上に「よく」などほめ言葉がないので、下への続きが悪い。経路ははっきりしないけれども、もともと一本歌の系統を引く巻十五・三六〇九の第二句のように、「尓波余久安良之（にはよくあらし）」とあったものが誤ってこうなったと見るべき。

◆白砂青松　慶野松原は現在も白砂青松の景を残す。波に洗われた白砂の中に、常緑の松の緑が清々しく映えている。慶野松原近くに住み、淡路島の小学校の教頭を務める小田某氏によると、子どもの頃よりも海浜の幅が狭くなったと言う。以前民家があったところも、浸食によって、海の中にあるという言い伝えもあるとか。この白砂青松も危機的な状況になっているのだろうかと思った。松林は、数百年のサイクルで盛衰を繰り返すと聞く。しかし、海浜浸食によって、消えていくことは悲しい。少しでも浸食を食い止めるために、護岸工事によってテトラポットやコンクリートブロックが延々続く浜辺も少なくない。慶野松原には、未だそこまでにはなっていないが、小田某氏の話を聞きながら、一抹の不安を覚えた。

参考文献

下田忠『瀬戸内の万葉』（桜風社、一九八四年）
西宮一民『萬葉集全注巻第三』（有斐閣、一九八四年）
伊藤博『萬葉集釋注二』（集英社、一九九六年）
犬養孝『〔改訂新版〕万葉の旅　下』（平凡社、二〇〇四年）
犬養孝『万葉の歌びとと風土』（中央公論社、一九八八年）
阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義第二巻』（笠間書院、二〇〇六年）
中西進編『万葉集事典』（講談社、一九八五年）
大久間喜一郎・森淳司・針原孝之編『万葉集歌人事典〔拡大版〕』（雄山閣、二〇〇七年）